

シュッコンカスミソウ切り花の湿式輸送における 輸送溶液の品質保持効果

1. はじめに

高温期に採花するシュッコンカスミソウは、開花の進行が早いため、低温期よりも早い開花ステージで採花されます。しかし、切り前を早めると、1本の切り花に多くの小花を有するシュッコンカスミソウでは、生け花後十分に開花しないことが懸念されます。

ここでは、湿式輸送において、輸送用溶液の種類が花持ち延長に効果があるのかを採花時の開花程度と乾式輸送との比較で検討しました。

2. 試験方法

材料は2006年5月19日に採花した品種「雪ん子」を切り花長60cmに調整後、前処理剤で処理して用いました。試験区には、採花時の開花ステージがA（1段開花：5～8%開花）およびB（2段開花：15～18%開花）が開花した段階（図1）と、これらに湿式（1%ショ糖＋抗菌剤溶液および抗菌剤溶液のみ）と乾式を組み合わせた計6区を設けました。輸送を想定し12℃で48時間恒温庫で保持した後、この切り花を蒸留水に生け、12時間日長、光強度 $10 \mu\text{mol}\cdot\text{m}^{-2}\cdot\text{s}^{-1}$ 、室温 $23\pm 1^\circ\text{C}$ 、相対湿度50～80%条件下で花持ち調査を行いました。

3. 試験結果

生け花後の切り花重は、切り前の違いによる差は認められませんでした。輸送中の処

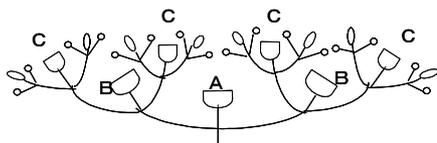


図1 シュッコンカスミソウ切り花の開花程度

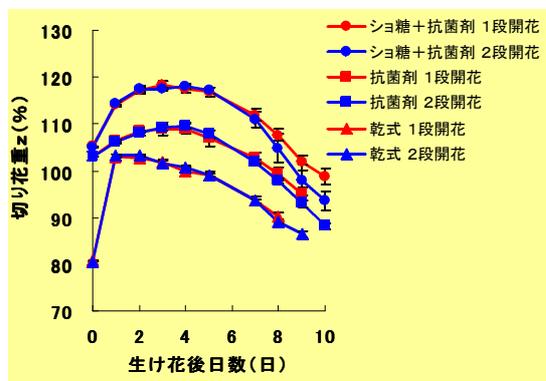


図2 切り前および輸送用溶液の種類と生け花後の切り花重の推移

注) ショ糖溶液は1%とした

² 切り花重は、輸送シミュレーション開始前を100とした値

理方法によって違いが認められました（図2）。すなわち、開花ステージにかかわらず、ショ糖＋抗菌剤区は、生け花開始直後に切り花重が急増した後も、高い値で推移しました。また、抗菌剤区はショ糖＋抗菌剤区ほど切り花重は増加しませんでした。一方、乾式区は輸送中に20%程度切り花重は減少し、生け花開始直後に回復したものの以後漸減しました（図2）。

生け花後の開花率は、同じ切り前では、ショ糖＋抗菌剤区、抗菌剤区、乾式区の順に高く推移しました（図3）。また、ショ糖＋抗菌剤区では生け花後5～6日目まで急激に開花が進行し、1段開花においても、2段開花の抗菌剤区よりも開花が進みました。

萎凋花は、乾式区では湿式区よりも早く、生け花後3日目から発生が認められました（データ省略）。

4. まとめ

ショ糖溶液での湿式輸送は、生け花後の切り花重の増加と開花を促進し、切り前を早めた切り花でも、開花率を高めることができました。ただし、輸送温度や時間により、輸送溶液の吸収量や開花の進行程度が異なると考えられるため、今後は温度、時間などの輸送条件と併せた切り前の検討を行います。

（園芸部 宮前治加）

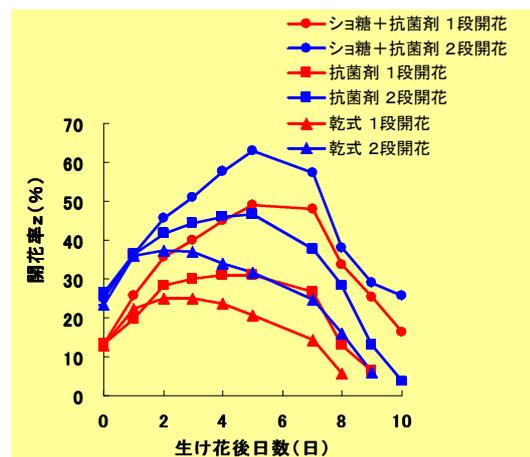


図3 切り前および輸送用溶液の種類と生け花後の開花率の推移

注) ショ糖溶液は1%とした

² 全小花数に占める観賞価値のある開花小花数の割合